

2011年秋からサボっていた「弦き」を記憶を辿りながら再開したい。

9月の終わりには、台東区生涯学習センター内のミレニアムホール開場10周年の記念コンサートシリーズに出演。妻の田中美千子のピアノでリサイタルを行った。プログラムの中心には以前からのレパートリーを選んだが、小品は私にとって新しいものや、しばらく弾いていなかった曲を取り上げた。このホールはいつ弾いても音響が素晴らしいので大変気持ちがよい。なお、この実況はプライベートDVDに収録した。近々、私のホームページに応募要項を掲載して、数には限りがあるが、皆さまにお届けできるようにしたいと思っている。

10月にはミュンヘンとウィーンの教会で一ノ関の藤の園への募金のチャリティーコンサートを行い、バッハの無伴奏ソナタ第2、第1、及びパルティータ第2を弾いた。以前より技術的な心配が少なくなったことや、暗譜も含め各曲、各楽章の解釈のコンセプトに迷いが減少したことは、ささやかな進歩と捉えてもよいのか？と考えている。リピートのある楽章では、さらに大胆な変化を試みるべく新機軸考案の必要性を感じている。というのもバロック時代に於いては「退屈」が最大の罪悪だったのだから。

10月末には京都の大徳寺での松下敏幸氏のレクチャーコンサートに出かけ、芸大時代のお仲間の演奏で、この本堂の音響の素晴らしさに驚いた。

同じ10月には、イタリア・バロックヴァイオリンの大家、エンリーコ・オノーフリ氏が来日し、彼の質の高いエキサイティングな演奏に改めて感動した。私にとっての収穫は、チェンバロの渡辺孝氏のとても柔軟で的確な合奏技術と独創性に富む即興の妙技に酔ったことだ。11月の彼の近江楽堂でのリサイタルも素晴らしかった。オノーフリ氏は公開レッスンを行ったが、これは期待を数段上回る貴重で充実したものだった。最も感服したことは、彼が常に音楽の本質に迫ろうとする態度である。決して自分が威張ったり、受講者たちに、いわゆる「上から目線」で接するのではなく、彼らと共に正しい技術で音楽解釈とその多様性を追究していくことだった。脆いガット弦で楽器を大きく美しく響かせるボーイングの技術については、出し惜しみすることなど微塵もなく懇切丁寧に説明し、受講者に理解し、習得させようと全身全霊で努力する姿にはジーンときて感動させられた。というのも、日本人にも稀にあるが、特に外国人のアーティストによっては、何故に受講者のレベルが高くてもバカにし切

った態度で彼らをさげすみ、何ら建設的なものをもたらさないばかりか、聴講していても受講者が気の毒になり、後味が悪く、忌々しい思いをすることが多いのだ。

1981年以來、東京城西ロータリークラブの会員である私は、11月下旬に松山ロータリークラブでロータリー精神の基本である奉仕について卓話をした後、友人の医師、西村氏のピアノでモーツァルトのソナタを協演した。翌日は、クレモナ在住の楽器製作者菊田浩氏のヴァイオリンを披露する会で彼の楽器を数本弾き比べさせていただいた。菊田氏の楽器の最大の長所は、澄んだ透明な音色で、使用する弓の種類によって微妙に、しかしはっきりと、ニュアンスが変化するのは興味深かった。

12月上旬には、ピアニストの大迫貴氏と福岡、鹿児島、大阪の3都市でベートーヴェンのソナタ第4、第7、第2、第10番の4曲を演奏した。大迫氏とは昨年4月頃から半年以上にわたって、各曲、各楽章ごとに綿密な練習を重ね、二人の解釈を確立できたので、アンサンブルの心配も全く無く、お互いに実力を発揮することができたと思う。幸い各地で再共演をとのコールをいただけたので、今秋から前記の都市では2回にわたって残り6曲を、また東京では3回にわたり、白寿ホールで全曲演奏を行うことを決めた。これらのコンサートを企画するきっかけとなったのは、1978年に収録したフランツ・ルップ氏とのベートーヴェン・ソナタ全集の復刻盤CDで、これを12月にリリースできたのは、この上ない喜びである。

## 2012年

2012年1月3日には、台東区主催の旧奏楽堂ニューイヤーコンサートで、妻の田中美千子と演奏した。曲目はベートーヴェンのスプリングソナタ以外は、クライスラーのオリジナル作品と編曲や、他のヴァイオリニストによる華やかな小品を9曲程弾き、新春のムードを出せたかと思う。チケットが低額だったこともあり、会場が満席だったのも嬉しかった。数日後、これらの小品に数曲を加え全15曲を収録したので、今年中にはリリースしたいと考えている。

2月19日には、昨年震災後の計画停電の影響からの交通事情でリハーサルが不可能で中止せざるを得なかった、東京クラシックプレイヤーズ(TCP)のコンサートを、今年実現することができた。プログラム前半のグリーグの小品2曲は透明感の中にも暖かい音色を作ることに成功した。バルトークのルーマニア民俗舞曲は使用した版

のアレンジに難があり、リハーサルで少し試行錯誤したが我々のバージョンを作ることができた。演奏はコンサートミストレスを務めてくれた三木晶子君の美しい音色による素晴らしいソロで、お客様に楽しんでいただけたと思う。プログラム冒頭、私の独奏によるメンデルスゾーンのエ短調協奏曲は、全体には美しい響きで特に伴奏は整然としていたのに、終楽章で私自身がポカをしでかしてしまい、整った演奏にならなかったことは、オーケストラのメンバーとお客様に大変申し訳なく思っている。お詫びの気持ちの中で、後悔と反省を肝に銘じている。プログラムのメインである、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲作品 132 は、合奏の破綻もなく、常に豊かで美しい響きで、曲の内容の濃さ、形式の美しさに迫り、ベートーヴェンの高遠な精神世界を実現できたことは永年の努力の結晶、と深い充実感に包まれた。

今回は初参加のメンバーが多かったが、主要なリーダー達が頑張ってくれたのと、全員が柔軟な感性を発揮してくれたので、響きに統一感を得られたのは嬉しい。終演後の打ち上げパーティーで、昔の私の門下で現在各所で活躍しているのだが、今回は参加できなかった人達が「次のチャンスには是非」という人達が多数おり、またリハーサルも泊りがけの合宿形式にしたいとの要望も多かったので、遅くとも、夏休み前には来春に向けてスケジュールを考えたい。

昨秋以来、聴いたコンサートで、強く印象に残ったものは、前述のオノーフリ氏のコンサートの他に、バロックヴァイオリンの名手寺神戸亮氏がニューシティーフィルを指揮したり、弾きながらリーダーを務めた演奏会だった。オケも彼の意向と gusto を汲み取って演奏に成功していたし、休憩中の彼のトークも充実していた。寺神戸氏は以前よりもずっと自分自身のコンセプトを明確に持ち、それを我々聴衆にも解る演奏をするようになったのは、彼のたゆまぬ研鑽の賜物であり、大いに賞賛できる。1月下旬、東京朝日ホールでのランチタイムコンサートで弾かれたテレマンのファンタジーは特に素晴らしかった。直後、彩の国で2回に亘るバッハ無伴奏全曲も決して悪くなかったが、トリル、リピート等に新機軸は余り感じられなかった。わざわざ遠くまで足を運んで大きな収穫だったのは、プログラム冊子にあった大角欣矢氏の解説文で、私にはとても示唆に富む内容で大変勉強させていただいた。

1月中旬には長田新太郎君のバッハ無伴奏も聴いた。解釈に共感できる部分は限られたが、美しい音色で弾かれていたのは好感が持てた。

バロックヴァイオリンや、またモダンの楽器でバロック風に演奏した場合にも、音

色的にいつも不満が残る。ヴァイオリンという楽器は美しく、可能ならばふくよかな音で演奏したい。例えば、イザベル・ファウストのバッハの演奏には感服するが、ここでは端正なアーティキュレーションの鮮明さが特に素晴らしい。しかし音色的にはやはり何かもの足りない。彼女がベートーヴェンのソナタを収録している風景の映像を見たが、バッハの場合とは正反対に、私には何の感動ももたらさなかった。ベートーヴェンにはもっと規模の大きい音量の多重性と艶が求められるのだ。

目下3月中旬、ヨーロッパにいるが、先日所用でウィーンに短期滞在した際、アルベルティーナで開催されていたフランス印象派の展覧会に行き、カミーユ・ピサロの絵に感動した。インプレッショニスト達個々の作家の特徴や素晴らしさは充分関知していたつもりだったが、この感動の理由を自分の胸に聞いてみると、ピサロの絵は、他の作家がボカしてしまうようなところも細部まではっきりと描き込まれていて、筆には尽くし難い色彩の暖かさと艶があるのだ。私は、ピサロから「バッハの無伴奏は私の絵のように弾きなさい」と言われたような気がしている。

3月下旬には、ピアノ教育連盟の招きで、ドイツのピアノの大家ペーター・レーゼ先生が来日され、コンサートの他に講演と公開レッスンがあるので、今から楽しみである。というのもレーゼ先生もイタリア・バロックヴァイオリンのオノーフリ氏と同様、音楽の本質だけに集中なさり、威圧であったり、奇をてらったりはなさらない方だから。

2月末、白寿ホールで辻本玲君のリサイタルを聴いた。彼は東京芸大在学中から優秀で大きなホープだったので、絶対に聴き逃してはならないとスケジュールを調整した。入場券が5,000円というのは新人のデビューとしては割高の印象もあったが期待は大きかった。出来としては若干の音程の不安定さを除いて良かった。音は透明でよく通っていたが、少し空洞的な響きでこちらのボディにグッと来る様な力強さが全くない。何か上澄液を飲んでる様で、音に濃淡がなく期待を裏切られた。ある財団から貸与された楽器とのことだが、自分の内面を表現できる楽器に換え、彼の持つ真の音楽性を発揮してほしい。

来る4月6日(金)19時、僭越ながら私が理事長を務める「NPO法人日独文化コミュニティー」が主催し東京赤坂のドイツ文化会館に於いてドイツの建築家で戦前日本に滞在し、東京都桂離宮の美などを我々日本人に再認識させたブルーノ・タウトに関

する講演とシンポジウムが開催され、その前後の短い演奏も私が務めることになった。

先日、講演者の田中先生をはじめ、シンポジウムに参加してくださる先生方と打ち合わせの会合を持った。その際、そこに同席された先生方から「建築を芸術(の一部)と捉えている建築家は非常に少ない」というお話を伺い衝撃を受けた。私の様な素人は建築物はまず機能的でなければならないが、使う側にとっての利便性と心地良さに加え、必ず美しさも具えていなければならない、と考える。例えば私が通勤で頻繁に利用する東京、副都心線の渋谷駅は使いにくいことこの上ない。無駄な空間が多すぎて利便性は最悪だ。芸術性に至ってはゼロだ。我々の企画する、ブルーノ・タウト関連のイベントへの参加動員に話が及んだ折、安藤忠雄氏の名前が立ったので、同席の建築家の先生方に、前述の副都心線渋谷駅のお話をし、これが安藤氏の設計によるものだとしたこと、と申し上げたら「彼は政治家に密着することに長けている」とのご指摘だった。「彼を極端に持ち上げ過大評価するのはマスコミだ」との結論に達した。確か2010年だったと記憶するが、日本経済新聞の「私の履歴書」欄に氏が一カ月に亘って書いて居られた。インフォメーションとして大変参考になったが、自画自賛的要素が鼻について、好感を持つに至らなかった。世間では、その人物に真の実力があるかどうかはさて置き、「いわゆる有名人を批判的な視点から捉えると、干される」と言われている。私は間もなく72歳になるので、もはや影響は少ない、と単純に考えている。

最後に音楽的にとても嬉しかった体験を二つ。

一つは東京音大の科目等履修生の期末試験の際、チェロの学生の弾いたベートーヴェンの初期のソナタのピアノを受け持った百武恵子さんの演奏だ。チェリストは、音色は良かったが音程は上ずり気味に不安定で音楽の内容もしっかり捉えるには程遠かった。しかしピアノは素晴らしかった。音色が澄んでいて透明でしかも、とても上品な艶があり、正に古典初期の作品に相応しいものだった。パートナーにも気を配りつつ、音量のコントロールも素晴らしく、アーティキュレーションや、フレージングも非の打ちどころがなかった。名前からもわかるが彼女はヴィオラ奏者として活躍なさる百武由紀さんのお嬢さんで、私が東京音大に勤め始めた頃、ピアノ伴奏科学生だった。在学中から優秀な1人だったが、卒業後フランスに留学し、2年ほど前に帰国した。その後も試験の伴奏等で演奏を聴いてはいたが、今回は出色の出来だった。良いものを聴いても、悪いものを聴いても、黙ってられない私は、さっそく連絡を取り感想を伝えた。新年度から東京音大に勤務してくださるとのことなので、彼女の演

奏に接するチャンスが増えるのは嬉しい。出来れば、モーツァルトのソナタや、今まで手掛けるチャンスがなかったハイドンのソナタにも百武さんとならチャレンジしてみたい。

最後に、大変良い意味で強く印象に残った演奏について記しておきたい。それは2月末、東京文化会館で行われた都民芸術フェスティバルで東京交響楽団とベートーヴェンの協奏曲を弾かれた竹澤恭子氏の演奏である。これは大変立派なもので、一貫した豊かな通る音で、音程のミスも音色のかげりも全く無く、アーティキュレーションもはっきりし、フレージングも端正な極めて質の高い素晴らしいものであった。この協奏曲をこの様に正統的に演奏できる日本人のヴァイオリニストが存在することを、我々日本人は大きな誇りとして良いだけでなく、世界を見渡しても、現役のトップクラス中のトップアーティストとして人間国宝ならぬ、全世界の宝とも言うべき貴重な人材と主張しても、決して過言ではないだろう。

今日のつぶやきは、さぼっていたものを取り返さねばならず、長くなってしまった。これからは、もう少し定期的に呟いていきたい。

2012年3月16日

ミュンヘンにて